

令和7年度 ボランティア養成セミナー 事業報告書

R7.6.28(土)～29(日) | 泊2日

◆ 目的

- ・ 青少年教育施設ボランティアに求められる知識・技能を習得し、教育事業や研修支援等の運営補助・指導補助などを担う人材を育成するとともに、ボランティア活動の推進及び充実を図る。
- ・ 青少年教育施設等でのボランティア活動の役割について理解を深める。

◆ 参加実績

- ・ 36名(内訳:高校生1名、大学生35名)

◆ 会場

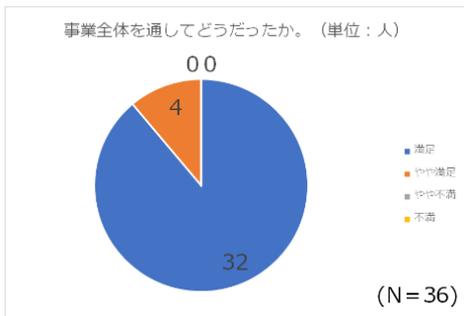
- ・ 国立若狭湾青少年自然の家

◆ 日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
6月28日(土)				受付	開講式・アイスブレイク	講義「青少年教育とは」	昼食(食堂)	講義「青少年教育施設の現状と運営」	休憩	講義「ボランティア活動の意義」	休憩	講義・演習「安全管理・救命救急法」 「ボランティア活動の技術」 (野外炊事編)			休憩	講義「ボランティア活動の活動内容理解」	入浴	就寝	
6月29日(日)	起床	朝のつどい	清掃・荷物移動 朝食(食堂)	講義・演習「安全管理・救命救急法」 「ボランティア活動の技術」 (海活動編)			昼食(食堂)	講義・演習「安全管理・救命救急法」	「法人ボランティアの登録制度」	閉講式									

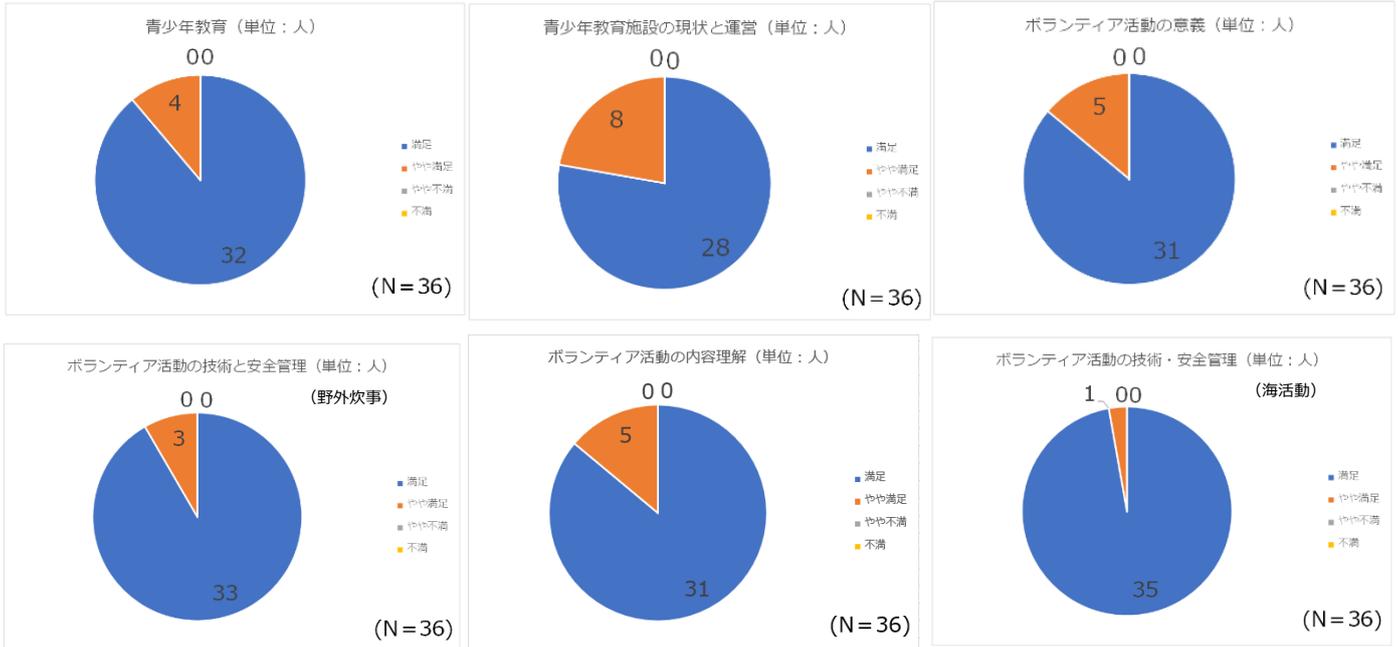
◆ 成果

◎「全体の満足度」に対して、36名中32名が「満足」と回答した。



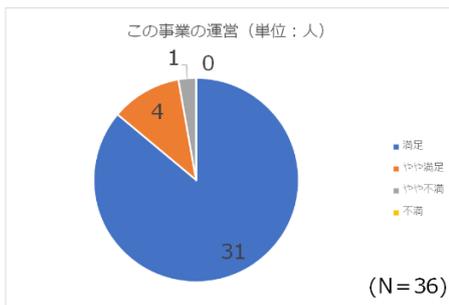
- ・ 若狭湾の職員で全講義ができたことは参加者にとっても「若狭湾」をイメージしやすい講義になったと思う。
- ・ カリキュラムの規定時数を一泊二日で修了しようとする時間的にタイトになりハードになった。
- ・ 安全管理の演習ができたことで体験を重視した内容を提供することができた
- ・ 純粋に自然を感じ、体験活動を楽しめている参加者も多かった。

◎各講義や演習等の満足度は以下のとおりとなった。



- ・ 講師の工夫で研修室1だけでなく、様々な場所を舞台にして講義を行うことができた。天井が高く仕切りのない場所(ふれあいホール)を使用する場合は声の反響に注意が必要である。
- ・ 講義の中でアクティブラーニングの要素を取り入れた体験プログラムや実際に浜辺に行き行って考えるような取り組みがあり、気持ちを切り替えながら講義に向かうことができた。
- ・ 昨年度は実技の活動時間を増やす工夫として、事前課題で動画視聴を行った。今年度はすべて対面での講義を行った。目の前で参加者の反応を見ながら伝えることができ、参加者も聞きやすかったと思う。
- ・ 講義を1日目にすべて実施し、1日目の夕方以降は実技を実施した。まだ疲れておらず緊張感があるうちに座学の講義をすることで参加者は集中して活動に向うことができていた。

・「事業の運営」の満足度は、以下のとおりとなった。



- ・ 講義をしていただいている裏で、担当職員と運営スタッフの先輩ボランティアで打ち合わせをしたことでスムーズに運営できた。しかし、学びの多い講義が聞ける機会にもかかわらず打ち合わせをしているのは非常にもったいないと感じた。
- ・ カリキュラムが決まっているため講義等の中で、職員や先輩ボラと話す機会を作ることがあまりできなかった。職員や先輩ボラとともに体験をする機会を増やし、自然の家の良さや活動内容の詳細を紹介できると当機構でのボランティア活動への興味関心も深まるのではないかと感じた。(以前は2泊3日の事業であった。実技編を別日に実施し、実技を取り入れる工夫をしたこともあった。)

◆ 参加者の声

(事業全体を通して)

- ・ 初めは、楽しくしようという思いしかなかったけど、話を聞いていくうちに、ボランティアという気持ちがあめばえて、子どもたちがどんな事をするかを考えながら行動できるようになった。
- ・ かなりのハードスケジュールだったけど、とても充実した時間をすごせし、新しいチャレンジや新しい仲間との活動が楽しかったため ボラの先輩も職員の方々もすごく良い人で、若狭もすごく良いところだった!また来たい。

(「青少年教育」の講義・演習について)

- ・ 実際に体を動かして、みんなとコミュニケーションをとったり、ボランティア側になったときにどうやって接するかを考えさせられた。
- ・ ホームランを打たせてあげられるようにサポートできる人になるべきだと感じた。
- ・ 視覚の情報が一番印象に残るという話が一番印象に残った。

(「青少年教育施設の現状と運営」の演習について)

- ・ 施設の利用者数が年々減ってきている現状を見て、なぜ減ってきているのだろうと疑問に思った。
- ・ 親や友人、クラスメイト、学校の先生などとコミュニケーションをとることができるから、子どもの時には青少年教育施設のようなところには必ず行ったほうが良いと思った。

(「ボランティア活動の意義」の演習について)

- ・ たくさんボランティアをしてきた人の話はすごく興味深くてどのエピソードもおもしろかった。ボランティア活動の意義は人それぞれらしいので、自分の意義を見つけたいと思った。
- ・ 子どもに「先生みたいなこと言うんだね」と言われた話で自分であればなんと声をかけたか、難しいと思った。

(「ボランティア活動の技術・安全管理(野外炊事)」について)

- ・ 小学校の記憶がよみがえり、協力や自分から積極的に行動する大切さを理解した。
- ・ みんなで協力して作ったカレーは1番美味しかった。
- ・ 子どもがいたらと考えると危険が多いため、どのような対策が必要か考えることができました。

(「ボランティア活動の内容理解」の講義について)

- ・ ボランティアを通して学べたことを先輩ボランティアから聞いて、さらにボランティアに関心を持った。
- ・ 2 人ともすごく話がうまくて、ボランティアでつちかった力なのかな。こんな人になりたいなあ と憧れをもった。

(「ボランティア活動の技術・安全管理(海活動)」について)

- ・ すごくたのしかった。ただ子どもたちと一緒にだと危険は多くなるし、自然が相手なのはすごく怖いことだなと思った。
- ・ 海・山それぞれで気をつけることが多いと知れた。「人的要因」「環境要因」
- ・ 複数の人と協力してイカダやカヤックができた。

(事業運営・職員の指導や助言について)

- ・ 時間をつめすぎているなどタイムスケジュールが厳しい。
- ・ 施設の特色に合わせた、安全管理などの説明がありわかりやすかった。
- ・ すごく楽しく、学べることがたくさんあった。
- ・ 子どもとの関わりに対する考えもすごく自分に合っていて、こんな人たちの元でボランティアしたいと思っ

◆事業運営のツボ・工夫・反省(ツボ・工夫)

全体を通して

- 参加者の事業全体の評価は、「満足」と「やや満足」と答えた人が多く、満足した事業を実施することができた。
- ボランティア養成セミナーではこれまで2名で先輩ボラ、班付きボラを兼任してきたが、今年度は生活面をメインにサポートする班付きボラ2名と先輩ボラとして発表をする2名の4名に依頼した。余裕を持って指示の伝達等ができた。

広報・申し込みについて

- 広報は、チラシを近隣だけでなく、隣県(滋賀県、京都府、大阪府、岐阜県、愛知県)の大学や専門学校等にも発送したがあまり効果が見られなかった。
→チラシ送付による広報は関係性の構築や直接持って行くなどの工夫が必要。
- 手渡して近隣の高等学校のボランティア担当の先生にと要項を伝えて渡す。
→直接学校より参加させられない連絡や、申し込みがある(定期考査の為不参加)など一定の成果は見られた。

講義について

- 講義の聞きやすさを考慮して今年度は対面形式で全講義を行った。
- 講師についても若狭湾の職員のみで実施することができ、予算削減につながった。また、若狭湾の職員だけで実施できたことで、慣れ親しんだフィールドを活用しながら講義ができ、より受講者が学びやすい形で行うことができた。
- 1泊2日で実施しているため時数通りにカリキュラムを実施すると大変タイトな日程となる。そのためカリキュラム外で、自然に親しんだり参加者同士が交流できたりするような時間の余裕がない。
→交通費が大きくなるため実施の日を2泊3日の方が金銭的に参加者の負担は少ないが、5、6月は連休が少なく日程が難しい。別日で実技編として自然に親しむ日を設定する方が実施しやすいと考える。
- 先輩ボランティア2名と事前に発表資料の確認を行い、参加者に伝える内容や参加者への働きかけ方などを共有した。同年代、先輩からの言葉は職員以上に参加者に伝わりやすいことが感想からもうかがえる。次年度も依頼するとよい。

安全管理と実技について

- 海の安全管理として、シーカヤックと組立式いかだを実施した。洋上の活動に関する安全管理として大切な視点を2つ活動の中に振り分けて実施した。そのことで施設に合わせた安全管理と実技の項目を合わせて実施することができた。あらかじめ担当者同士が入念に打ち合わせをし、活動の安全管理として使えるポイントを整理しておく必要がある。
- 海活動への満足度は非常に高い。しかし、今年度も昨年度に引き続き、シーカヤックと組立式いかだを実施したが、両方とも洋上の活動であり、海の入る活動がなかった。
→水中の観察ができるような活動と洋上の活動の二種類にするほうが様々な視点からの学びに繋がると考える。

◆ 活動写真



集合写真



開講式(所長挨拶)



アイスブレイクの様子



「青少年教育」講義の様子



「施設の現状と運営」講義の様子





「ボランティア活動の意義」講義の様子



「ボランティア活動の技術・安全管理（野外炊事）」の様子



「ボランティア活動の内容理解」講義の様子



「ボランティア活動の技術・安全管理（海活動）」の様子



「安全管理(まとめ)」の様子



「登録制度」の様子



閉講式(次長挨拶)

国立若狭湾青少年自然の家
企画指導専門職 池田 聡